

沖縄県うるま市平安座方言の動詞と形容詞の活用

當山 奈那

1 動詞

沖縄県うるま市平安座方言（以下、平安座方言）の動詞がもつ形態論的なカテゴリーには、現代日本語の動詞と同じように、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、やりもらいがある。形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統一する一般化された意味・特徴である。個々の形態論的なカテゴリーには、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるもの、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるもの、語尾のとりかえによってあらわされるものがある。

個々の形態論的な形式は、語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素の分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現するやくわりをもっている要素」であり、語尾は「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じて変化する部分で、残りの変化しない部分が語幹である。語幹と語尾の境界には、「-」を挿入する。

おのおのの動詞がどのように語幹を形成し、どのような語尾をともなって活用形を作るということは、個々の動詞の形づくりにとって重要である。語幹と語尾の形成は、動詞の活用のタイプに分類する上でも重要になる。また、個々の活用形の形づくりをみることによって、個々の活用形の成り立ちをしるうえでも重要である。

【表】動詞「kamun（食べる）」の語形変化

ムード		テンス	非過去形	過去形／第二過去形
		直説法	非強調形	kam-un（食べる）
	強調形	kam-iru（食べるのだ）	ka-daru（食べたのだ）／kam-utaru	
質問法	肯否質問	kam-un（食べるか）	ka-dan（食べたか）／kam-utan	
	疑問詞質問	kam-uga（食べるか）	ka-daga（食べたか）／kam-utaga	
	疑い	kam-ugaja:（食べるかな）	ka-dagaja:（食べたかな）／kam-utagaja:	
命令法		kam-a:（食べろ）		
勧誘法		kam-a（食べよう）		
連体形		kam-unu（食べる）	ka-danu（食べた）／kam-utanu	
連用	中止形	ka-di（食べて）、kam-a:ni（食べて）		
	同時形	kam-i:gina:（食べながら）		

形			
条件形	原因形	kam-ugutu (食べるから)	ka-dagutu (食べたから) / kam-utagutu
	契機形	kam-i:ne: (食べると)	
	前提形	kam-ura: (食べるなら)	
	譲歩形	ka-diN (食べても)	
	逆接形	kam-uhiga (食べるが)	ka-dahiga (食べたが) / kam-utahiga
	目的形	kam-i:ga (食べるに)	

動詞は、文のなかの機能にしたがって、終止形、連体形、連用形、条件形などの体系をもっている。

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に2系列（第一過去形と第二過去形）があるが、連体形のあらかず時間は、いいおわりの述語があらかず時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならばあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、形式上、現代日本語の第一中止形に対応し、単語づくりや形づくりの要素になる。単独では述語にならない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続していて、平安座方言では先行後続の時間的な関係をあらかずあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語づくり、形づくりの要素にもなる。

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

完成相の直説法の終止形、質問法の非過去形は、第一中止形に存在動詞 un (居る) が補助動詞としてくみあわさり、音声的に融合したものである。un (居る) が融合した活用形と、命令形や勧誘形など un の融合しない活用形が同居していることは、平安座方言を含む沖縄語の動詞の形づくりの大きな特徴である。動詞の活用形には、連体形の非過去 kam-unu、第二過去形 kam-utanu、条件形 kam-ura:、kam-ugutu、kam-utagutu などの un 融合型の活用形と、ka-di、kam-a:ni、kam-i:gina:、ka-diN などのような un 非融合型の活用形とが同居している。これは、動作や変化の進行をあらかずしていた un 融合型の動詞とひとまとまりの動作をあらかずしていた un 非融合型の動詞が統合し、融合型の活用形が非融合型の活用形を追い出した結果であろう。

2 平安座方言の動詞の形づくりの要素

平安座方言を含む多くの琉球語の動詞には、形態論的カテゴリーとして、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらい、それらを

構成する文法的な対立のしかた、文法的な形を構成する語幹（あるいは語根）は、現代日本語の動詞と共有のものを有し、音韻的にも対応している。語尾や助辞も、現代日本語と対応し、よく似た構造をもつものが少なくない。一方で、琉球語に固有の語尾や助辞、接尾辞もあって、琉球語独自の形態論的な体系を有している。

o>u、e>iの狭母音化、それに伴う子音の変化、前後する音声の同化による子音の変化などの音韻変化があり、その音韻変化は動詞の語幹、および語尾の音声形式にも及んでいて、平安座方言の動詞の形づくりを複雑なものにしている。

平安座方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹の三つの変種（ヴァリエーション）が存在する。この変種の名称は、上村幸雄（1963）による。上村は、この三つの語幹のほかに「融合語幹」「短縮形語幹」も設定しているが、平安座方言ではこれらは設定する必要はないと思われる。

語幹（基本語幹、音便語幹、連用語幹）と語尾の作り方から、平安座方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞に分けることができる、規則変化動詞は、さらに、強変化動詞と混合変化動詞に分けられる。強変化動詞は、基本語幹と連用語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ動詞である。音便語幹には、促音便語幹、撥音便語幹、そして、語幹末子音が脱落した脱落音便語幹の三つの変種がある。

混合変化動詞は、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末と音便語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

基本語幹は、命令形、勧誘形、同時形、条件形にあらわれる。連用語幹は、直説法と質問法の非過去形、連体形の非過去形の活用形にあらわれる語幹で、歴史的には、語基に人の存在をあらわすun（居る）が文法化して融合した語形にあらわれるものである。音便語幹は、直説法と質問法の過去形、中止形、譲歩形にあらわれる。

2. 1 基本語幹

基本語幹を構成要素にもつ活用形は、その動詞本来の形を保存している場合があって、当該動詞のなりたちを知る上で重要である。連用語幹も音便語幹も基本語幹から派生していて、基本語幹からそのなりたちを説明することができるという点でも基本的である。また、基本語幹は、使役動詞などの文法的な派生形式をつくる語基になるという点でも当該動詞の基本的な形式である。

平安座方言		日本語
強変化		強変化
I m	num-an（飲まない） / num-a:（飲め）	N1m nom-e
I b	tub-an（飛ばない） / tub-a:（飛ば）	N1b tob-e
I t	muQt-an（持たない） / muQt-a:（持て）	N1t mot-e
I t2	taQk-an（立たない） / taQkw-a:（立て）	N1t tat-e
I n2	sin-an（死なない） /	N1n sin-e
I k	kak-an（書かない） / kakw-a:（書け）	N1k kak-e
I d	nd-an（見ない） / nd-a:（見ろ）	N2 mi-ro
I g	kug-an（漕がない） /	N1g kog-e

I g	wi:g-aN (泳がない) /	N1g	ojog-e
I h	nZah-aN (出さない) /nZahw-a: (出せ)	N1s	das-e
I h	kuruh-aN (殺さない) /kuruhw-a: (殺せ)	N1s	koros-e
I r1	?ur-aN (売らない) /?ur-a: (売れ)	N1r	
I r1	tur-aN (取らない) /tur-a: (取れ)		
I r2	?are:r-aN (洗わない) /?are:r-a: (洗え)	N1w	ara-e
I r3	ko:r-aN (買わない) /		ka-e
I r3	wi:r-aN (酔わない) /		jo-e
混合変化		弱変化	
II e1	ku:r-aN (閉めない)	N2e	sime-ro
	nind-aN (寝ない)		ne-ro
	?akir-aN (開けない)		ake-ro
	sitir-aN (捨てない)		sute-ro
II e2	?ukir-aN (起きない)	N2i	oki-ro
	?urir-aN (降りない)		ori-ro
	?utir-aN (落ちない)		oci-ro
II i	cir-aN (着ない)		ki-ro
特殊変化		特殊変化	
III 1	h-aN (しない)		si-ro
III 2	ku:N (こない)		koi

強変化動詞の場合、語幹末の子音は平安座方言と日本語とでよく対応している。I m、I b、I t、I k、I g などである。

日本語の強変化動詞の語幹末が母音になる動詞 (N1w) に対応する平安座方言の強変化動詞 (I r2、I r3) の語幹末に r があらわれる。同様に、現代日本語の弱変化動詞に対応する平安座方言の動詞の基本語幹末も r になる。平安座方言で語幹末子音が r であらわれる現象を、かりまた (2010) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

古代日本語の f 語幹動詞 (基本語幹末子音が f の動詞で、現代日本語の N1w の動詞) に対応する平安座方言の動詞 (I r2、I r3) は、基本語幹末にも r があらわれ、r 語幹化する。

2. 2 連用語幹

強変化動詞の第一中止形は、基本語幹に語尾-i のついたものだが、語幹末の子音が語尾 i の逆行同化によって音韻変化し、第一中止形の語幹が基本語幹と異なる形になった。この語幹の変種が連用語幹である。終止形の直説法、質問法の非過去形、第二過去形、および連体形の非過去形、第二過去形などは、第一中止形をもとにして派生した活用形だが、語幹 (あるいは語基) と語尾や接辞、補助的な単語などとのむすびつき方のつよさの度合いによって語幹と語尾が融合し、相互に影響して変化した結果、語幹に変種を生じさせたものがある。また、特定の活用にかぎってこれらの変化をこうむらなかつたものがある。

基本語幹	連用語幹	
強変化	第一中止形	直説法非過去
I m num-aN (飲まない)	num-i (飲み)	num-uN (飲む)
I b tub-aN (飛ばない)	tub-i (飛び)	tub-uN (飛ぶ)
I t muQt-aN (持たない)	muQc-i (持ち)	muQc-uN (持つて)
I n2 sin-aN (死なない)	sin-i (死に)	sin-uN (死ぬ)
I k ?aQk-aN (歩かない)	?aQc-i (歩き)	?aQc-uN (歩く)
I d nd-aN (見ない)	nd-i (見)	nd-uN (見る)
I g kug-aN (漕がない)	kuz-i (漕ぎ)	kuz-uN (漕ぐ)
I h kuruh-aN (殺さない)	kuruh-i (殺し)	kuruh-uN (殺す)
I r1 ?ur-aN (売らない)	?u-i (売り)	?u-iN (売る)
I r2 ?are:r-aN (洗わない)	?are:-i (洗い)	?are:-N (洗う)
I r3 ko:r-aN (買わない)	ko:-i (買い)	ko:-iN (買う)
混合変化		
II e1 ?akir-aN (開けない)	?aki: (開け)	?aki:-N (開ける)
sitir-aN (捨てない)	siti: (捨て)	siti:-N (捨てる)
II e2 ?ukir-aN (起きない)	?uki: (起き)	?uki:-N (起きる)
?urir-aN (降りない)	?uri: (降り)	?uri:-N (降りる)
II i cir-aN (着ない)	ci: (着)	ci:-N (着る)
特殊変化動詞		
III 1 h-aN (しない)	hi: (し)	hu-N (する)
III 2 ku:N (こない)	ʃi: (来)	ʃu(:)N (来る)

基本語幹末の子音が m、b、d、h、n になる動詞は基本語幹と連用語幹が同音である。基本語幹末が k、g、t になる動詞の連用語幹は、語尾 i による逆行同化によって破擦音化し、基本語幹とは異なる形になっている。基本語幹末の子音が r になる動詞 (I r1) の連用語幹は、語幹末が母音になっていて、基本語幹とことなる形になっている。これは、語尾 i の影響を受けた口蓋音化によって語幹末の子音 r が脱落したために生じたものである。

I r1 ur-i > ?uri > ?u-i (売り)

平安座方言の混合変化動詞の第一中止形語幹末には、長母音があらわれ、r 語幹化している基本語幹とは異なっている。この変種も連用語幹である。古代日本語では混合変化動詞の基本語幹 (連用語幹も) は、語幹末が i になる動詞と e になる動詞の 2 タイプがあるが、平安座方言のばあい、いずれも e になるタイプにさかのぼる。

2. 3 音便語幹

第二中止形は、第一中止形に助辞 te がついてできているが、強変化動詞のばあい、第一中止形の語尾-i を含む音節と、助辞 te が相互に影響を与えて変化した結果、語幹と語尾の再編が行われた。あらたに発生した語幹を音便語幹とよぶ。音便語幹の語幹が母音でおわるタイプと促音でおわるタイプがあるが、これは、第一中止形の基本語幹の末尾子音のち

がいに応じてあらわれる。

① 母音語幹

I m 動詞と I b 動詞の第二中止形の語尾は di である。

nu-di (飲んで)、ka-di (食べて)、ju-di (読んで)、ku-di (汲んで)、tu-di (飛んで)、
ʔasi-di (遊んで)、ju-di (呼んで)、ʔira-di (選んで)

r 語幹動詞は、第二中止形の語尾が ti である。

ʔu-ti (売って)、tu-ti (取って)、hu-ti (降って)、kwi-ti (くれて)、ko:ti (買って)、
wi:-ti (酔って)、ara-(t)ti (洗って)

I k 動詞と I h 動詞の第二中止形の語尾は ci である。n 語幹動詞のうち「ʔanni-ci (言つて)」のみがこのタイプに含まれる。

ʔanni-ci (言つて)、ʔaQ-ci (歩いて)、ka-ci (書いて)、n-ci (見て)、nza-ci (出して)、
kuru-ci (殺して)、ʔutu-ci (落として)、ci-ci (着て)

I g 動詞の第二中止形の語尾は zi である。また、「sinun (死ぬ)」の第二中止形も語尾は zi である。

si-zi (死んで)、ku-zi (漕いで)、wi:-zi (泳いで)

② 促音語幹

促音便語幹になる動詞は、I t 動詞と「切る」である。第二中止形の語幹末が促音になる。語尾は ci である。

muQ-ci (持って)、maQ-ci (待って)、taQ-ci (立って)、ciQ-ci (切って)

③ 音便なし

現代日本語の弱変化動詞に対応する平安座方言の混合変化動詞の第二中止形も語幹尾が母音でおわるが、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていないと考える。

ku:-ti (閉めて)、ʔaki-ti (開けて)、siti-ti (捨てて)、ʔuki-ti (起きて)、ʔuri-ti (降りて)、
ʔuti-ti (落ちて)、i:-ti (もらって)

2. 4 強変化動詞

強変化動詞は、下位タイプの分化がはげしく、どの動詞がどんな活用形をつくるのか、規則を見つけるのが難しい。活用形を導き出す規則は基本語幹末子音によって決まってくるが、動詞語幹の音環境によって容易にやぶられる。

(1) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、numUN (飲む)、kamUN (食べる)、jumUN (読む)、kumUN (汲む) などがある。基本語幹と連用語幹の末尾子音は -m になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は d である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
num-AN (飲まない)	num-UN (飲む)	nu-di (飲んで)
kam-AN (食べない)	kam-UN (食べる)	ka-di (食べて)
jum-AN (読まない)	jum-UN (読む)	ju-di (読んで)
kum-AN (汲まない)	kum-UN (汲む)	ku-di (汲んで)

(2) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tubUN (飛ぶ)、ʔasibUN (遊ぶ)、jubUN (呼ぶ)、ʔirabUN (選ぶ) などがある。基本語幹と連用語幹の末尾子音は -b になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は d である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
tub-aN (飛ばない)	tub-uN (飛ぶ)	tu-di (飛んで)
ʔasib-aN (遊ばない)	ʔasib-uN (遊ぶ)	ʔasi-di (遊んで)
jub-aN (呼ばない)	jub-uN (呼ぶ)	ju-di (呼んで)
ʔirab-aN (選ばない)	ʔirab-uN (選ぶ)	ʔira-di (選んで)

(3) g 語幹動詞

g 語幹動詞には、kuzUN (漕ぐ)、wi:zUN (泳ぐ) などがある。基本語幹の末尾が -g、連用語幹の末尾子音は -z になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は z である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
kug-aN (漕がない)	kuz-uN (漕ぐ)	ku-zi (漕いで)
wi:g-aN (泳がない)	wi:z-uN (泳ぐ)	wi:-zi (泳いで)

(4) k 語幹動詞

k 語幹動詞には、kacUN (書く)、ʔaQcUN (歩く)、hataracUN (働く) などがある。基本語幹末が -k、連用語幹末が -c、音便語幹末が母音で、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
kak-aN (書かない)	kac-uN (書く)	ka-ci (書いて)
ʔaQk-aN (歩かない)	ʔaQc-uN (歩く)	ʔaQ-ci (歩いて)

また、ふつう、命令形は基本語幹に語尾 -a: をとりかえることによって作るが、このタイプの動詞は語幹が唇音化する。h 語幹動詞の命令形も同様のふるまいをする (kakw-a: (書け)、ʔaQkw-a: (歩け))。

ʔicUN (行く) は、基本語幹末子音が -k であり、連用語幹が -c である点で、k 語幹動詞とみなせるが、音便語幹末の子音は異なる。また、語尾頭子音も z である。第二中止形の語尾が -zi になるのは、「sinUN (死ぬ)」の n 語幹動詞と共通している。ʔicUN (行く) の活用形のタイプは、k 語幹動詞に、n 語幹動詞の活用語幹のタイプが補充法の手続きによって混ざったと考えられる。

基本語幹	／連用語幹	／音便語幹
ʔik-aN (行かない)、ikwa: (行け)	／ʔic-uN (行く)	／n-zi (行って)、n-zaN (行った)

(5) t 語幹動詞

t 語幹動詞には、muQcUN (持つ)、maQcUN (待つ) がある。基本語幹末が -t、連用語幹末が -Qc、音便語幹末が -Q で、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
muQt-aN (持たない)	muQc-uN (持つ)	muQ-ci (持って)
maQt-aN (待たない)	maQc-uN (待つ)	maQ-ci (待って)

なお、一例、「taQc-uN (立つ)」のみ、基本語幹末が -k であらわれた。命令形も k 語幹動

詞のように、taQkw-a: (立て) になる。連用語幹と音便語幹、それぞれの語尾は他の t 語幹動詞と共通する。

taQk-an (立たない) taQc-un (立つ) taQ-ci (立って)

(6) d 語幹動詞

d 語幹動詞は ndun (見る) の 1 例のみ確認した。基本語幹と連用語幹が同じ-d であらわれ、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
nd-an (見ない)	nd-un (見る)	n-ci (見て)

(7) n 語幹動詞

n 語幹動詞は、これまで、sinun (死ぬ) と ?annun (言う) の二つの動詞が確認されている。しかし、両者はタイプが異なる。sinun (死ぬ) は、b 語幹動詞と m 語幹動詞と同じように、基本語幹と連用語幹が同じである。音便語幹が母音でおわり、語尾が z で始まるのは、g 語幹動詞と共通している。

もうひとつの ?annun (言う) も、基本語幹と連用語幹が同じである。しかし、音便語幹の語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
sin-an (死なない)	sin-un (死ぬ)	si-zi (死んで)
?ann-an (言わない)	?ann-un (言う)	?anni-ci (言って)

(8) h 語幹動詞

h 語幹動詞は、基本語幹、連用語幹が同じ形であらわれ、語幹末子音が -h である。音便語幹は母音でおわり、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
nzah-an (出さない)	nzah-un (出す)	nza-ci (出して)
kuruh-an (殺さない)	kuruh-un (殺す)	kuru-ci (殺して)
?utuh-an (落とさない)	?utuh-un (落とす)	?utu-ci (落として)

また、ふつう、命令形は基本語幹に語尾-a:をとりかえることによって作るが、このタイプの動詞は語幹が唇音化する (nzahw-a: (出せ)、kuruhw-a: (殺せ)、?utuhw-a: (落とせ))。

(9) r 語幹動詞

r 語幹動詞には、4つのタイプが存在する。ひとつは、古代日本語との比較から、「取る」「売る」などの r 語幹動詞に対応するタイプである。ふたつめは、w 語幹動詞に属するもの。ここで、「洗う」のみは、連用語幹が異なるので別に分類している。基本語幹末子音は r で、連用語幹末は母音になっている。

よっつめは「ci:-N (切る)」のように、音便語幹末に促音があらわれるタイプである。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
I r1 ?ur-an (売らない)	?u-in (売る)	?u-ti (売って)
I r1 tur-an (取らない)	tu-in (取る)	tu-ti (取って)
I r1 hur-an (降らない)	hu-in (降る)	hu-ti (降って)
I r1 kwir-an (くれない)	kwi:-N (くれる)	kwi-ti (くれて)
I r2 ?are:r-an (洗わない)	are:-N (洗う)	ara-(t)ti (洗って)

I r3	ko:r-aN (買わない)	ko:-iN (買う)	ko:ti (買って)
I r3	wi:r-aN (酔わない)	wi:-N (酔う)	wi:-ti (酔って)
I r4	cir-aN (切らない)	ci:-N (切る)	ciQ-ci (切って)

2. 5 混合変化動詞

混合変化動詞は、連用語幹も音便語幹も同じ形で末尾に母音が変わる。基本語幹末に子音が変わる。母音語幹と子音語幹の混合したタイプである。平安座方言の場合、基本語幹が強変化動詞化することによって混合変化動詞に移行したものが分類される。

	基本語幹	連用語幹	音便語幹
II e1	ku:r-aN (閉めない)	ku:-iN (閉める)	ku:-ti (閉めて)
	?akir-aN (開けない)	?aki:-N (開ける)	?aki-ti (開けて)
	sitir-aN (捨えない)	siti:-N (捨てる)	siti-ti (捨てて)
	i:r-aN (もらわない)	i:-N (もらう)	i:-ti (もらって)
II e2	?ukir-aN (起きない)	?uki:-N (起きる)	?uki-ti (起きて)
	?urir-aN (降りない)	?uri:-N (降りる)	?uri-ti (降りて)
	?utir-aN (落ちない)	?uti:-N (落ちる)	?uti-ti (落ちて)
II i	cir-aN (着ない)	ci:-N (着る)	ci-ci (着て)

2. 6 特殊変化動詞

	基本語幹	連用語幹	音便語幹
	h-aN (しない)	hu-N (する)	hi-ci (して)
	ku:N (こない)	fu(:)N (来る)	fi: (来て)

【資料】動詞活用一覧

	基本語幹	連用語幹	音便語幹
強変化			
I m	num-aN (飲まない)	num-uN (飲む)	nu-di (飲んで)
I m	kam-aN (食べない)	kam-uN (食べる)	ka-di (食べて)
I m	jum-aN (読まない)	jum-uN (読む)	ju-di (読んで)
I m	kum-aN (汲まない)	kum-uN (汲む)	ku-di (汲んで)
I b	tub-aN (飛ばない)	tub-uN (飛ばす)	tu-di (飛んで)
I b	?asib-aN (遊ばない)	?asib-uN (遊ぶ)	?asi-di (遊んで)
I b	jub-aN (呼ばない)	jub-uN (呼ぶ)	ju-di (呼んで)
I b	?irab-aN (選ばない)	?irab-uN (選ぶ)	?ira-di (選んで)
I t	muQt-aN (持たない)	muQc-uN (持つ)	muQ-ci (持って)
I t	maQt-aN (待たない)	maQc-uN (待つ)	maQ-ci (待って)
I t2	taQk-aN (立たない)	taQc-uN (立つ)	taQ-ci (立って)
I n2	sin-aN (死なない)	sin-uN (死ぬ)	si-zi (死んで)
I n	?ann-aN (言わない)	?ann-uN	?anni-fi (言って)

I k2	ʔik-aN (行かない)	ʔic-uN (行く)	N-zi (行つて)
I k	ʔaQk-aN (歩かない)	ʔaQc-uN (歩く)	ʔaQ-ci (歩いて)
I k	kak-aN (書かない)	kac-uN (書く)	ka-ci (書いて)
I d	nd-aN (見ない)	nd-uN (見る)	N-ci (見て)
I g	kug-aN (漕がない)	kuz-uN (漕ぐ)	ku-zi (漕いで)
I g	wi:g-aN (泳がない)	wi:z-uN (泳ぐ)	wi:-zi (泳いで)
I h	nzah-aN (出さない)	nzah-uN (出す)	nza-ci (出して)
I h	kuruh-aN (殺さない)	kuruh-uN (殺す)	kuru-ci (殺して)
I h	ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuh-uN (落とす)	ʔutu-ci (落として)
I r1	ʔur-aN (売らない)	ʔu-iN (売る)	ʔu-ti (売つて)
I r1	tur-aN (取らない)	tu-iN (取る)	tu-ti (取つて)
I r1	hur-aN (降らない)	hu-iN (降る)	hu-ti (降つて)
I r1	kwir-aN (くれない)	kwi:-N (くれる)	kwi-ti (くれて)
I r2	ʔare:r-aN (洗わない)	are:-N (洗う)	ara-(t)ti (洗つて)
I r3	ko:r-aN (買わない)	ko:-iN (買う)	ko:ti (買つて)
I r3	wi:r-aN (酔わない)	wi:-N (酔う)	wi:-ti (酔つて)
I r4	cir-aN (切らない)	ci:-N (切る)	ciQ-ci (切つて)
I r5		a-N (ある)	a-ti (あつて)
I r6	ur-aN (いない)	u(:)-N (いる)	u-ti (いて)

混合変化

II e1	ku:r-aN (閉めない)	ku:-iN (閉める)	ku:-ti (閉めて)
	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki:-N (開ける)	ʔaki-ti (開けて)
	sitir-aN (捨てない)	siti:-N (捨てる)	siti-ti (捨てて)
	i:r-aN (もらわない)	i:-N (もらう)	i:-ti (もらつて)
II e2	ʔukir-aN (起きない)	ʔuki:-N (起きる)	ʔuki-ti (起きて)
	ʔurir-aN (降りない)	ʔuri:-N (降りる)	ʔuri-ti (降りて)
	ʔutir-aN (落ちない)	ʔuti:-N (落ちる)	ʔuti-ti (落ちて)
II i	cir-aN (着ない)	ci:-N (着る)	ci-ci (着て)

特殊変化

h-aN (しない)	hu-N (する)	hi-ci (して)
ku:N (こない)	ʔu(:)N (来る)	ʔi: (来て)

3 形容詞

琉球諸語の形容詞は、日本語の形容詞と同じく、連体修飾語、述語としてはたらく品詞である。終止形、連体形、連用形、条件形などの文中での機能を表しわける形式を有する。形容詞は、述語として機能することからテンスのカテゴリーを有する。しかし、アスペクト、ヴォイスなどの文法的カテゴリーを有しない。これらの特徴は、琉球諸語の形容詞が時間的限定性のないものの特性をあらわしながら、形容詞の連用形にももの存在をあらわす動詞を組み合わせて作られることによる。

琉球諸方言の形容詞は、形づくりの違いによって、大きく二つのタイプに分けることができる。一つは、日本語の第一形容詞（イ形容詞）に相応し、日本語の第一形容詞と語根を共通にするものである。これを琉球諸語でも第一形容詞とよぶことができる。もう一つが日本語の第二形容詞（ナ形容詞）に相当するもので、琉球諸語でも連体形の語尾が **na** で現れる。第二形容詞を述語にするときは、モノの存在をあらわす動詞から派生した繫詞をくみあわせる。繫詞を使用して述語を形成することは名詞と同じである。第一形容詞は琉球諸語でそれぞれに発達しているが、第二形容詞は語彙の数も少なく、発達していない。

3.1 第一形容詞

平安座方言の形容詞は、語幹に接辞 **sa** を後接させたサ連用形に「有る」に対応する存在動詞が組み合わさった形式を有する。那覇方言の ?atfisaN （暑い）、 takasaN （高い）、 kurusaN （黒い）などは、サ連用形に存在動詞 **aN**（ある）が文法化して組み合わさったさり、さらに融合しているが、平安座方言のサ連用形は、**s>h** の変化がおきていて、 takahaN （高い）、 ?amahaN （甘い）のようになっている。ただし、一部に ?umussaN （おもしろい）、 wassaN （悪い）など **s** を残す語がある。

語構成的には「語幹+サ+アン（有る）」から成り、存在動詞 **aN**（ある）と似た語形変化をする。

下に、第一形容詞「 takahan （高い）」のパラダイムをあげる。（形容詞のカテゴリカルな意味としては、特性形容詞、属性形容詞に分類できる）

【表】第一形容詞 takahan （高い）の活用

テンス ムード		非過去形	過去形
		直説法	
直説法	非強調形	takaha-N （高い）	takaha-taN （高かった）
	強調形	takaha-nu （高いのだ）	takaha-tanu （高かったのだ）
質問法	肯否質問	takaha-nu （高いか）	takaha-tanu （高かったか）
	疑問詞質問	takaha-ga （高いか）	takaha-taga （高かったか）
	疑い	takaha-gaja :（高いかな）	takaha-tagaja :（高かったかな）
連体形		takaha-nu （高い）	takaha-tanu （高かった）
条件形	原因形	takaha-gutu （高いので） takaha-nu	takaha-tagutu （高かったので）
	条件形	takaha-ra :（高いなら）	
	うらめ条件	takaha-tin （高くても）	
	逆接形	takaha-higa （高いけど）	takaha-tahiga （高かったけど）

形容詞は、動詞と同じように直説法、質問法のムード形式をもつが、命令法、勧誘法はもたない。直説法の強調形と、質問法の肯否質問形、連体形の非過去形と過去形が同じ形式であられる。（条件形の一部の形式も）

01. ?itsati ?umuhanu. (会えて うれしい!)
02. taro:ga mutso:nu kuruman kuruhanu? (太郎が 持っている 車も 黒いの?)
03. magihanu suika (大きい スイカ)
04. ku:hanu nnudʒigwa: (小さい 島ダコ)

文の中での機能にしたがって、終止形、連体形、条件形をもつ。また、テンスによって過去形と非過去形が対立しているが、過去形はひとつしかない。動詞には、話し手による直接確認を明示する第二過去形と直接確認について明示しない第一過去形が存在し、対立しているのとは異なる。

否定形式には、takako: ne:N (高くない) のように、「takaku (高く)」にとりたて助辞「ja (は)」が融合した形式に、ne:N (ない) が組み合わさったものがある。また、?itsunako: ne:N (忙しくない) のように、否定形式の語幹末に「シ」があらわれず、標準語のク活用型とシク活用型の違いが失われている形容詞もある。

〈感情〉 ?uturuhan~?uturusAN (恐ろしい)、?umussaN (楽しい、うれしい)、?iso:han (うれしい)、ʃimuguruhan (心苦しい)、kanahan (いとしい)

〈生理的状态〉 ja:han (ひもじい)、hi:sAN (さむい)

〈知覚関係〉 karahan (塩辛い、辛い)、ʃi:sAN (すっぱい)、?amahan (甘い)、ma:han (おいしい)、ndzhan (苦い)

※対象に対する特徴づけと、対象によって引き起こされた話し手の一時的な感覚の両方をあらわす形容詞。

〈色と形〉 kurudi/kuruhan (黒い)、o:di/o:han (青い)、?akadi/?akahan (赤い)

〈大小関係〉 hikuhan (低い)、ku:han (小さい)

〈人の性格など〉 ?umussaN (おもしろい)

※人の特徴づけをあらわすグループ。名詞であらわれることが多い。

〈評価〉 jassAN (安い)、hirumahan (不思議だ)、jagamahan (うるさい)、ʃikarahan (つまらない)、midʒirahan (珍しい)、

〈その他〉 ?itsunahan (いそがしい)

また、色形容詞は基本的に第一形容詞の形をとるが、直説法非過去形に動詞の第二中止形と同じ活用形が用いられることがある。kurudi/kuruhan (黒い)、o:di/o:han (青い)、?akadi/?akahan (赤い) がこれまでにみられた。これは Im 型動詞と共通している。ただし、*kurumun のように Im 動詞の完成相非過去形の形式は使わないとのことである。逆に、属性形容詞や特性形容詞に分類できる他の形容詞は、色形容詞のような動詞型の活用形はもたない。

【表】色形容詞 ?akasan (赤い) の活用

ムード		テンス	非過去形	過去形
		直説法	非強調形	?akahan/?akadi (赤い)

	強調形	?akahanu (赤いのだ)	?akahatanu (赤かったのだ)
質問法	肯否質問	?akahanu (赤いか)	?akahatanu (赤かったか)
	疑問詞質問	?akahaga (赤いか)	?akahataga (赤かったか)
	疑い	?akahagaja: (赤いかな)	?akahatagaja: (赤かったかな)
連体形		?akahanu (赤い)	?akahatanu (赤かった)
条件形	原因形	?akahahutu, ?akahanu (赤いから)	?akahatagutu (赤かったので)
	条件形	?akahara: (赤いなら)	
	うらめ条件	?akahatin (赤くても)	
	逆接形	?akahahiga (赤いけど)	?akahatahiga (赤かったけど)

上の表にみられるように、動詞活用型の色形容詞は、連体形はもたない¹。中止形（や条件形の一部）は可能である。

05. uri to:bi:ra: kurudi, magahanu. (この ゴキブリ、黒くて 大きいな。)
 06. tinto:ga ?akadi, kadʒi ɸufʃun. (空が 赤いと、台風が くる)

主体が〈類〉であり、主体の特性をあらわす形容詞述語文の場合、述語の形式は kurudi でも kuruhan でもよい。

07. garasa:ja kurudi/kuruhan. (カラスは 黒い。)

色形容詞で一時的な状態をあらわす場合、安慶名方言では「クルー ソーン (黒くしている)」「アカー ソーン (赤くしている)」のように形容詞の語幹にソーン (している) をくみあわせて述語にすえる²が、平安座ではこの形式は用いないとのことである。かわりに、kurudo:N のような動詞の継続相の形式や、kurudiru u:N のような第二中止形に焦点化助辞=ru を後接させ、存在動詞 uN (いる) をくみあわせた形式をとる。

08. satsunu sudinu kurudo:N. (シャツの 袖が 黒くなっている。)
 09. wano:ja:i! ?ja: kutse: kurudiru u:Nhi:. (うわあ! あんたの 口は 黒くなっているよ)

色形容詞以外の第一形容詞の場合、一時的な状態はサ連用形に、「スル」の継続相の形式をくみあわせて表現する。下の例は、話し手が目撃している第三者の一時的な状態をとらえている例である。11 の例のように「-gisan (～しそう)」の形式を述語に用いることもできる。

10. taro:ja go:kakuhiʃi ?umusa ho:tahi:N. (太郎は 合格して うれしそうだったよ。)
 11. taro:ja go:kakuhiʃi ?umusagisan. (太郎は 合格して うれしそう。)

¹ kurudiru u:nu のように、焦点化助辞=ru を後接させ、存在動詞 uN (いる) の連体形をくみあわせた形が連体的に名詞を飾ることは可能なようであるが、あまり用例を確認できていない。

² かりまた (2007)

3.2 第二形容詞

第二形容詞は、連体形を標準語の第二形容詞の語尾と同じ「na」にするが、それ以外の活用形は、名詞述語文を作るときと同じようにハダカの形（語幹）にコピュラ「jan」をくみあわせてつくる。

【表】第二形容詞 *gandzu: jan*（元気だ）の活用

テンス ムード		非過去形	過去形
直説法	非強調形	<i>gandzu: jan</i> （元気だ） ／ <i>gandzu: han</i>	<i>gandzu: jatan</i> （元気だった） ／ <i>gandzu: hatan</i>
	強調形	<i>gandzu: jaru</i> （元気なのだ）	<i>gandzu: jataru</i> （元気だったのだ）
質問法	肯否質問	<i>gandzu: jan</i> （元気か）	<i>gandzu: jatan</i> （元気だったか）
	疑問詞質問	<i>gandzu: jaga</i> （元気か）	<i>gandzu: jataga</i> （元気だったか）
	疑い	<i>gandzu: jagaja</i> （元気かな）	<i>gandzu: jatagaja</i> （元気だったかな）
連体形		<i>gandzu: na</i> （元気な） ／ <i>gandzu: hanu</i>	<i>gandzu: jatanu</i> （元気だった） ／ <i>gandzu: hatanu</i>
条件形	原因形	<i>gandzu: jagutu</i> （元気なので）	<i>gandzu: jatagutu</i> （元気だったので）
	条件形	<i>gandzu: jara</i> 、 <i>gandzu: jare</i> （元気なら）	
	うらめ条件	<i>gandzu: jatin</i> （元気でも）	
	逆接形	<i>gandzu: jahiga</i> （元気だけど）	<i>gandzu: jatahiga</i> （元気だったけど）

ただし、直説法の非過去形 *gandzu: han*、過去形 *gandzu: hatan*、連体形の非過去形と過去形では、第一形容詞と同じ形式をあわせて持っている。意味の違いは確認できなかった。

12. *taru: ja gandzu: hando: ja:*.（太郎は 元気だよ。）

13. *nika: he: hendzanu kkwagwa: ta: buru gandzu: jatando: /gandzu: hatando:*.

昔は 平安座の 子供たちは みんな 元気だったよ。

他の活用形もすべて第一形容詞の形式にできるのか、他の第二形容詞も第一形容詞の形式にできるのか、確認できていない。

なお、本報告のデータは、全て平安座出身／在住の話者3名、T・I（S3生、女性）、M・T（S4生、女性）、M・M（S10生、女性）への面接調査によるものである。

参考文献

- ・ 上村幸雄 (1963) 「首里方言の文法」『沖縄語辞典』国立国語研究所編
- ・ かりまたしげひさ (2010) 「琉球語安慶名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- ・ かりまたしげひさ (2002) 「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき—城辺町保良方言の形容詞の活用を中心に—」宮岡伯人編『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』科学研究費成果報告書
- ・ かりまたしげひさ (2007) 「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
- ・ 八亀裕美 (2007) 「形容詞研究の現在」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
- ・ 鈴木重幸 (1983a) 「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
- ・ 鈴木重幸 (1983b) 「動詞の形態論的な形の内部構造について」『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
- ・ 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- ・ 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- ・ 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

資料

「自治会に来なかった理由」

- A : ei, ʔja:mo: nu:nfī ʃinu: dʒiʃikainkai ku:ntaga?
 ねえ！ あんたは どうして 昨日、 自治会に 来なかったの？
- B : bjo:in̄kairu ndʒaru. hokanu tsun̄kai ʔanniʃe:taruħi:.
 病院に 行ったんだよ。他の 人に 言って あったし。
- A : jan? ʔandataru? ma:nu wassataga?
 ええ？ そうだったの？ どこが 悪かったの？
- B : te:kikenʃin̄ jataħi:.
 定期検診 だったの。
- A : te:kikenʃinja kajo:biru janhani?
 定期検診は 火曜日でしょう？
- B : kajo:be: ju:dʒinu ʔatti, ʔiʃi:wantando:.
 火曜日は 用事が あって、行けなかったんだよ。
- A : ʃinu:kara ʔutanu renʃu:ga hadʒimatanda:.
 昨日から 歌の 練習が 始まったよ。
- B : na: saŋgwaʃa: jagutu, he:hanja:.
 もう サングワチャー (行事名) なんて、はやいね。
- A : so:kutu he:haħija:.
 本当に はやいねえ。
- B : so:gwaʃinu ʃandu ʔumura:, na: saŋgwaʃiruħi:.
 正月が 来たと 思ったら、もう サングワチャーだね。

- A : so:gwaŋɪN mmiŋiŋi ʔitsunahataçi:.
正月も とても 忙しかったね。
- B : me:niŋi me:niŋi ʔitsunahaçi:.
毎日 毎日 忙しいね。
- A : handara: naraŋgutu me:niŋi mando:tando:.
やらないと いけないことが 毎日 たくさんだったよ。

「カゴを借りたい」

- A : heisari:.
こんにちは。
- B : ʔo:i, nu:jaga.
はいはい。 なにかな。
- A : hatakiŋkai ba:kinu ko:kitijo:. ʔja: ba:ki karaɸa:.
畑で カゴが 壊れてね。 あんたの カゴを 貸して。
- B : ʔo: ʃimundo:. ʃa: nudi:kwa:.
うん、いいよ。 お茶 飲んでおきなさい。
- A : tsu:ja ʃa: numunu hima: ne:çiN.
今日は お茶を 飲む 暇が ないよ。
hatakiŋkai handara: naranu ʃigutu aŋgutu.
畑で やらないと いけない 仕事があるから。
- B : na: ʔiritan. uri miso:ra:.
もう 入れた。 ほら、召し上がりなさい。
- A : na: ʔikandara: naraŋçi:. nudi ʔikai:.
もう いかないと 行けないのにね。 飲んで いろいろか。
- B : da: ʔamɸa tsutsawan nudi ʔikada:.
さあ、もう 一杯、 飲んで いきなさいよ。

「先輩と後輩の会話」

- A : na: wano: ke:jabiraçi:.
もう 私は 帰りましょうね。
- B : ke:ru ɸuru:?
帰るのかい？
- A : ʔu:.
はい。
- B : ʔitta:ga ʃi:ne:, wano: wakaku naigutu na:hiN ku:jo:.
お前たちが 来ると、 私は 若く なるから もっと 来るんだよ。
- A : namanu gutuhi mmaganʃa: mu:ruhi kanahahiŋi sudatiti
今の ようにして 孫たちを みんなで かわいがって 育てて
ʔiʃfabiraja:.
いきましようね。

B : ʔja:mUN ʔja: kkwa sudatiti mo:kirijo:ja:.
 お前も お前の子を 育てて 儲けなさいよ。
 A : ʔiʔiN mo:ki jabi:gutu.
 いつも 儲けて いますので。

magihanu de:kuni
 おおきな 大根

ʔusume:ga de:kuninu sani maʔutan.

おじいさんが 大根の タネを まいた。

'hikattu ʔamahanu de:kuniŋkai narijo:. mmiʔi magihanu de:kuniŋkai narijo:.'

「とても 甘い 大根に なれよ。とても 大きな 大根に なれよ。」

'wano:jai !'

「ほお」

ʔamahanu magihanu de:kuniga nato:tan.

甘い 甘い 大根が できていた。

ʔusume:ja de:kuni nuʔzo:ndo:.

おじいさんは 大根を めいているよ。

'to:hai ! ʔuriʕa:uri ! ʔuriʕa:uri !'

「せーの、うんとこしょ！どっこいしょ！」

'ʔuriʕa:uri ! ʔuriʕa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔanʕinʔON, de:kune: nugirantaʕi:.

けれども、 大根は めけなかったよ。

ʔusume:ja pa:pa: judi ʔAN.

おじいさんは おばあさんを 呼んで きた。

pa:pa:ga ʔusume: hippati

おばあさんが おじいさんを ひっぱって

'ʔuriʕa:uri ! ʔuriʕa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔanʕinʔON, de:kune: nugirantaʕi:.

けれども、 大根は めけなかったよ。

pa:pa:ja mmaga judi ʔAN.

おばあさんは 孫を 呼んで きた。

nmagaga pa:pa: hippati pa:pa:ga ʔusume: hippati

孫が おばあさんを ひっぱって おばあさんが おじいさんを ひっぱって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが 大根を ひっぱって

'ʔuriʕa:uri ! ʔuriʕa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔançiʔiŋ, de:kune: nugirantaçi:.

けれども、大根はぬけなかったよ。

mmaga: ʔinnu judi ʔan.

孫は犬を呼んできた。

ʔinnuga mmaga hippati mmagaga pa:pa: hippati

犬が孫をひっばって孫がおばあさんをひっばって

pa:pa:ga ʔusume: hippati ʔusume:ga de:kuni hippati

おばあさんがおじいさんをひっばっておじいさんが大根をひっばって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

na:da, de:kune: nugirantaçi:.

まだまだ、大根はぬけなかったよ。

ʔinno: maja: judi ʔan.

犬は猫を呼んできた。

maja:ga ʔinnu hippati ʔinnuga mmaga hippati

猫が犬をひっばって犬が孫をひっばって

mmagaga pa:pa: hippati pa:pa:ga ʔusume: hippati

孫がおばあさんをひっばっておばあさんがおじいさんをひっばって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが大根をひっばって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ŋñaça:, de:kune: nugirantaçi:.

あーあ、大根はぬけなかったよ。

maja:ja ʔenʔu judi ʔan.

猫はねずみを呼んできた。

ʔenʔuga maja: hippati maja:ga ʔinnu hippati

ねずみが猫をひっばって猫が犬をひっばって

ʔinnuga mmaga hippati mmagaga pa:pa: hippati

犬が孫をひっばって孫がおばあさんをひっばって

pa:pa:ga ʔusume: hippati

おばあさんがおじいさんをひっばって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが大根をひっばって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri ! ʔariça: na: ʔi:ke:n.'

「うんとこしょ！どっこいしょ！よし、もう一回。」

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri ! ʔitaiça: !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！やった！」

wano:ja:i, de:kuniga nugitaçi:.

わーい、大根がぬけたよ。